

世界遺産の敷地利用について*

地形的分析による空間評価

A Study of Site Use in World heritage

-Space evaluation by geographical feature-analysis-

田島 敬悟¹⁾・江守 央²⁾・伊澤 岬³⁾・大沼 郁俊⁴⁾

By Keigo TAJIMA¹⁾・Hisashi EMORI²⁾・Misaki IZAWA³⁾・Fumitoshi OONUMA⁴⁾

1. 研究の目的

国土や都市における自然環境をこれまでの合理的・経済的空間利用の時代から、限られた資源を精神的空間としてとらえる時代といえる。その現象の一つに自然再生事業にうかがうことができる。本稿はこの「精神的空間」を前稿「京都の社寺・庭園境内の敷地利用について 地形的分析による空間評価」で取上げた境内とほぼ同じ空間概念となる、日本の世界遺産に指定された登録物件の範囲を対象として、地形を生かした空間利用を建物とオープンスペースとの関係によってとらえる。また再生すべき方向性を見出し、さらにわが国の歴史的な社寺・庭園境内の地形分析による空間評価の客観性を高め今後の空間評価法として発展させたい。

2. 研究の方法

1) 調査対象と世界遺産の評価

調査対象 世界遺産とは世界の貴重な文化財や自然を人類共通の財産として保護し、保全してゆく国際的な制度で、世界遺産条約はユネスコ総会で採択され、日本は1992年に批准した。登録された物件は、文化遺産としては1993年に法隆寺地区の仏教建造物と姫路城が、1994年古都京都の文化財1995年白川郷・五箇山の合掌造り集落、1996年原爆ドーム、巖島神社、1998年古都奈良の文化財、1999年日光の社寺、2000年琉球王国のグスク及び関連遺産群以上9地域で対象遺産は44件となる。

これまでのわが国の文化財は一般的に建物や庭園を単体として取り扱ってきたが、世界遺産で指定された登録物件の範囲は、記念工作物、建造物群遺跡（文化的景観

を含む）でこの文化的景観の概念に「里山など自然的要素が強い宗教、芸術、文化などの事象と関連する文化的景観」とされている。これは建物とオープンスペースを含む総合的な空間概念であり、これは対象遺産として44件コアゾーン（核心地域）となる。さらにこのコア・ゾーン（核心地域）の外周には、登録された世界遺産を保護するために利用を制限し、環境を保全するための地域としてのバッファゾーン（緩衝地域）が指定され、さらにその外周に既存の指定などによる歴史環境保全地域としてコントロールゾーンが指定され、面的な指定が登録物件の範囲空間を中心になされている。

44件を機能別に分類すると 社寺・庭園他、 城・城跡、 集落、 他（墓・拝所・記念シンボル） 原始林となる。 ～ が建築・庭園で 他および は建物とオープンスペースとの関係の視点から外れるが、地形的特徴をとらえる上で有効であり対象に取上げている。さらに一団地としての敷地を単位に見ると日光の社寺（東照宮・輪王・二荒山神社）は同一敷地で1件として登録されており、また首里城跡と園比屋武御獄石門は同一敷地として扱う。また賀茂別雷神社は4箇所、延暦寺は3箇所、五箇山の合掌造り集落は2箇所に分散しているがそれぞれ一団地敷地を単位に1、1、2として42件を対象とする。その内訳は は28件、 7件、 3件、 3件、 1件となる。また延暦寺は3箇所に分散しているがこれらを含むバッファゾーン（緩衝地域）を含む範囲で1件とする（図-1、図-2）。

世界遺産の評価 沖縄遺産を含めほぼ網羅的な指定と言える。また現在世界遺産の暫定リストには古都鎌倉の寺院・神社ほか（鶴岡八幡宮、建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺ほか）彦根城、吉野ケ里遺跡がある。そこで指定された遺産で補充が必要な対象として、まず建築史的系譜として 上代の伊勢、出雲と 数奇屋建築と回遊式庭園の桂離宮、修学院離宮がさらに地形的視点として 山岳伽藍としての高野、吉野などが考えられる。 については前稿でとりあげており前稿を加えることで全般に客観性は高いと考える。

*キーワード：地形、世界遺産、自然再生

¹⁾ 学生員、工学、日本大学理工学部社会交通工学科
（千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5503、
E-mail:tajima_keigo@trpt.cst.nihon-u.ac.jp）

²⁾ 正員、工学、日本大学理工学部社会交通工学科
（千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5503、
E-mail:emori@trpt.cst.nihon-u.ac.jp）

³⁾ 正員、工博、日本大学理工学部社会交通工学科
（千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5503、
E-mail:izawa@trpt.cst.nihon-u.ac.jp）

⁴⁾ 非会員、工学、日本大学理工学部社会交通工学科
（千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5503）

2) 分析方法

前稿『京都の社寺・庭園境内の空間利用について 地形的分析による空間評価』にならう。

3. 分析結果

1) 規模的特徴

10ha未滿に半数が、40ha以上に26%が分布。100ha以上は姫路、200ha以上醍醐、300ha以上は春日林、厳島、1500ha以上は延暦寺で幅広い分布と言える。

2) 地理的特徴

都心から距離は10km未滿に62%、10km以上30km未滿に14%、30km以上6件14%に分布。アプローチ標高は120m以上7件17%で、日光(580m)合掌3件(320~480m)ほか京都2、沖縄1が含まれる。合掌3件(320~480m)ほか京都2、沖縄1が含まれ、高標高までの高範囲で分布と言える。

3) 地形的特徴

高低差 敷地レベル差は720mまで幅広いが、100m未滿に73%が分布。200m以上は京都3件(上賀茂・醍醐・延暦)、奈良2件(東大・春日林)、厳島。利用レベル差について、建物間レベル差は20m未滿に80%と集中傾向が見られ、100m以上は日光と醍醐と延暦。アプローチレベル差は100m未滿に分布し、20m未滿に73%と集中傾向が見られた。最大利用レベル差は20m未滿に77%と集中傾向が見られ、40m未滿は2件加わるのみ。100m以上は日光と醍醐と延暦。以上敷地レベル差がいかに大きい値となっても利用レベル差としては、ある値以上では利用し難いことがうかがえた。また、建物間レベル差での100m以上の日光と醍醐と延暦に参詣空間としての人間のスケールを超えた神のスケールともいべき値があることがうかがえた。(図-3~6)

勾配 敷地平均勾配は京都境内の段階別分類で分析する。これによると上限値73%以内にすべてが分布。10%未滿の低勾配40%、10%を超え30%未滿の中勾配24%、30%を超える急勾配36%となった。急勾配は京都6件、合掌、日光、春日山、厳島、沖縄・斎場の各1件。建物敷地平均勾配 低勾配54%、中勾配37%、急勾配9%となった。急勾配は京都の3件。以上勾配についても敷地平均勾配が高い値になっても利用勾配となる建物敷地平均勾配の値は集中傾向にある(図-7、図-8)。

地形形状 4つの基本型で「斜面」6件「山」4件「半島」2件「盆地」3件また「重複」4件と「複合型」7件である。「山」4件は沖縄の城・城跡で、城による「山」の象徴的事例が抽出できた。姫路は、城跡指定範

囲の関係で10%以下であるが典型的な「山」といえる。「複合型」のうち醍醐(敷地平均勾配61%)上賀茂(同46%)春日(同25%)は「山」を中心に多面的な地形の魅力により象徴的な空間を構成している。また日光は「半島」と「盆地」の「複合型」でさらに入れ子式に小「盆地」が加わり、多面的な地形の魅力をもつ地形形状である。さらに「盆地」の象徴的事例として五箇村相倉が抽出できた(図-9)。

4. 京都境内との比較

1) 規模的特徴では、10ha未滿に47%と世界遺産が半数で、40ha以上に京都境内4、世界遺産11件(内奈良4、京都3、姫路、合掌、日光、厳島)と相対的に世界遺産が規模的に大きい。

2) 地理的特徴では、都心から距離は10km未滿81%に62%、30km以上2件に6件と世界遺産に遠距離までのバラツキがみられる。アプローチ標高は120m以上15件に世界遺産7件で日光と合掌1の値が京都境内を上回って若干世界遺産に高い値がうかがえた。

3) 地形的特徴

高低差 敷地レベル差はともに720mまで幅広いが、100m以内84%に73%、200m以上6件に6件と相対的に同じような分布となる。利用レベル差について、建物間レベル差は20m未滿79%に80%とともに集中傾向が見られた。アプローチレベル差は、20m未滿85%に73%と集中傾向が見られた。最大利用レベル差は20m未滿74%に77%で、40m未滿は88%に82%と集中傾向が見られた。以上、幅広い敷地レベル差に対し利用レベル差では境内、世界遺産ともに人間のスケールにもとづく集中がみられ、具体的には建物間レベル差は20m、最大利用レベル差は40mが目安と考える。

勾配 敷地平均勾配は低勾配43%に40%、中勾配32%に24%、急勾配25%に36%となった。建物敷地平均勾配は低勾配44%に54%、中勾配41%に37%、急勾配14%に9%と相対的に同じような分布となった。また勾配についても人間のスケールにもとづく集中傾向が建物敷地平均勾配にうかがうことが出来た。勾配の段階別分類で春日大社が敷地平均勾配25%の中勾配でこれに隣接する春日原始林が32%急勾配で、30%による中、急勾配分類の貴重な目安と言える。

地形形状 4つの基本型「斜面」28件に6件「山」4件に4件「半島」5件に2件「盆地」11件に3件で「重複」1件に4件と複数の型による「複合」7件に7件である。基本形による分類をより充実するとともに、「複合」に多

B・Z：バッファゾーン
C・A：コントロールゾーン

			B・Z	C・A	分類
法隆寺地域の仏像建造物	1	法隆寺			寺
	2	法起寺			寺
姫路城	3	姫路城			城
古都京都の文化財	4-A	賀茂別雷神社			神社
	5-B	賀茂御祖神社			神社
	6-C	教王護国寺			寺
	7-D	清水寺			寺
	8-E	延暦寺			寺
	9-F	醍醐寺			寺
	10-G	仁和寺			寺
	11-H	平等院			寺
	12-I	宇治上神社			寺
	13-J	高山寺			寺
	14-K	西芳寺			寺
	15-L	天龍寺			寺
	16-M	鹿苑寺			寺
	17-N	慈照寺			寺
	18-O	龍安寺			寺
	19-P	西本願寺			寺
	20-Q	二条城			城
白川郷、五箇山	21	白川郷			集落
の合掌造り集落	22	五箇山・菅沼			集落
	23	五箇山・相倉			集落
原爆ドーム	24	原爆ドーム			シンボル
厳島神社	25	厳島神社			神社
古都奈良の文化財	26-A	東大寺			寺
	27-B	興福寺			寺
	28-C	春日大社			神社
	29-D	春日山原始林			自然
	30-E	元興寺			寺
	31-F	薬師寺			寺
	32-G	唐招提寺			寺
	33-H	平城京跡			庭園他
日光の寺社	34	日光東照宮他			寺
沖縄王国のグスク及び関連遺産群	35-A	玉陵			墓
	36-B	首里城跡			城
	37-C	園比屋武御獄石門			城
	38-D	識名園			庭
	39-E	今帰仁城跡			城
	40-F	勝連城跡			城
	41-G	斎場御獄			拝所
	42-H	座喜味城跡			城
		中城城跡			城

図 - 1 調査対象

元的な地形の魅力の有する事例を多く抽出できた。

5. おわりに

高低差・勾配は値の高い敷地でも利用空間では、限られた値に集中することが明らかとなった。これは境内や世界遺産の敷地における参詣者、観光客に対する人間的スケールによる集中と考える。一方で人間的スケールを越える神的スケールともいえる高い値の存在が認められた。さらに魅力的な空間を創出する地形形状の分析が重要な視点であることが確認できた。

今後、欠落しているわが国の歴史的に重要な社寺・庭園境内ならびに敷地利用上特徴ある著名な境内を補充しより客観性をはかりたい。また地形形状を高低差、勾配によるランク付けでパターン化してモデル的な分類を提案したい。

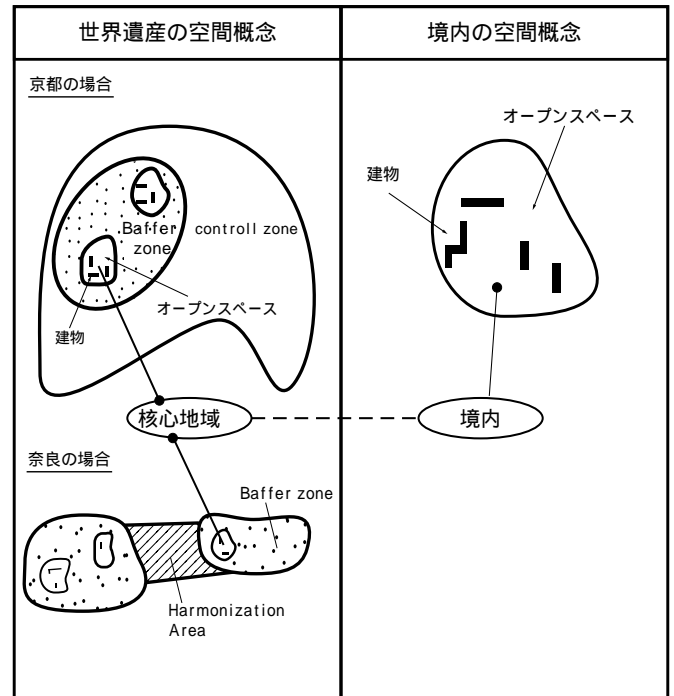


図 - 2 空間概念図

	斜面	山	半島	盆地	件数
基本型	玉陵 13	首里城跡+ 園比屋武御獄石門 28	春日山原始林 32	龍安寺 8	15
	慈照寺 17	座喜味城跡 35	中城城跡 35	五箇山・相倉 45	
	東大寺 25	今帰仁城跡 38		高山寺 66	
	西芳寺 29	勝連城跡 43			
	識名園 38				
	宇治上神社 52				
重複型		斎場御獄 33	五箇山・菅沼 11	白川郷 20	4
		延暦寺 46			
複合型		春日大社 25	日光東照宮他 41	鹿苑寺 11	7
		賀茂別雷神社 46	清水寺 43		
		醍醐寺 61			
		厳島神社 67			
			合計		26

図 - 9 地形形状別敷地平均勾配

数値は敷地平均勾配 (%)

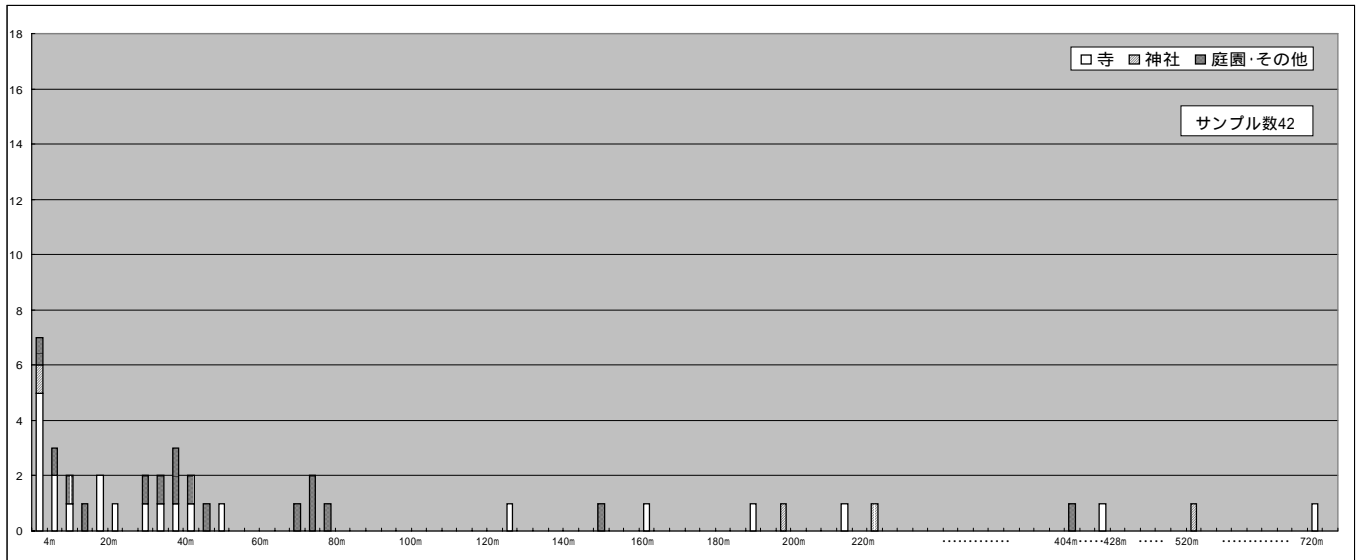


図 - 3 敷地レベル差

参考文献

- 1、伊澤岬「丘陵地に建つキャンパスの計画的研究」(学位論文)1980
 - 2、樋口忠彦「日本の景観」春秋社 1981
 - 3、「千年の都市、世界遺産 古都京都の文化財(京都市、宇治市、大津市)」
第22回世界遺産支援京都実行委員会 1988
- その他、各地域の世界遺産登録にともなう報告書

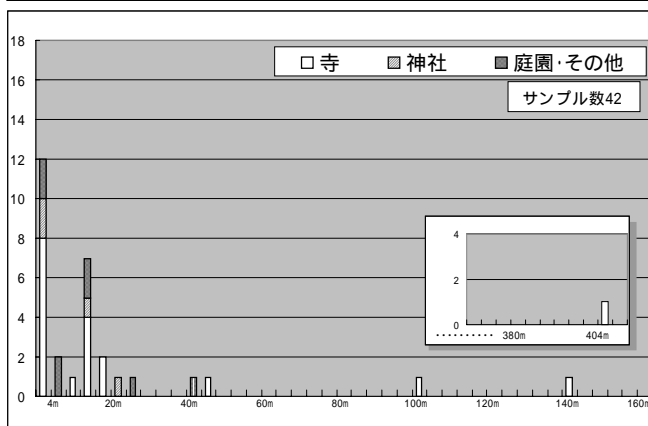


図 - 4 建物間レベル差

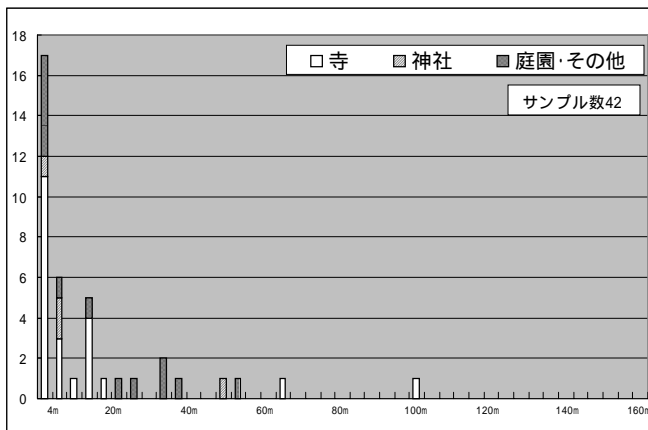


図 - 5 アプローチレベル差

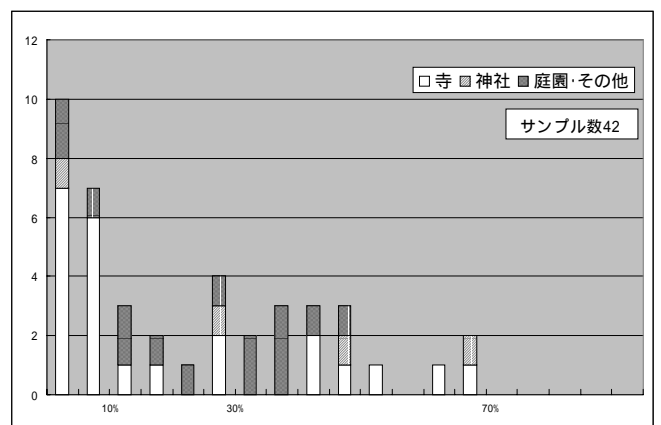


図 - 7 敷地平均勾配

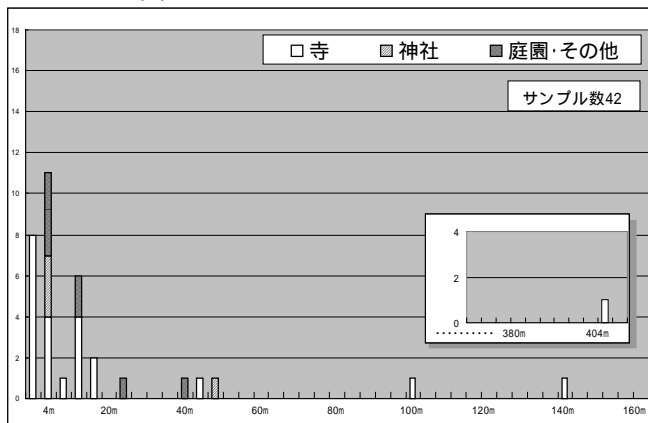


図 - 6 最大利用レベル差

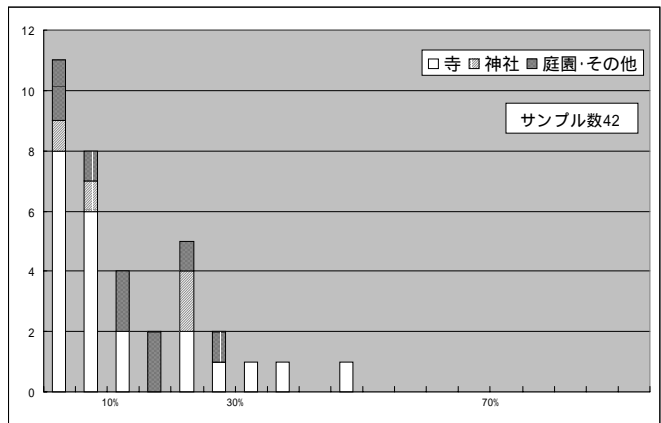


図 - 8 建物敷地平均勾配